

人と関わっていくことは、時にわずらわしく、
ぶつかったりしてしんどいことも多い。
それでも誰かとつながっているということは、
「生きる支え」になるのだと私は信じています。

NAOKO SASAKI

佐々木 直子さん | 下町の肝っ玉母さん



パンダナとエプロンがトレードマークの肝っ玉母さん

子育て七転び八起き

編集部 このたび出版した『子育て七転び八起き』、一男六女、肝っ玉母さんの子育てエッセイですが、どんな想いを込められたのですか。

佐々木 私が育ってきた時代。生活が豊かになっていく代わりに、少しずつ何かが失われていきました。昔は小さなちゃぶ台に家族そろっての食事が当たり前で、たくさんのお話がありました。子どもの声でにぎやかな路地裏の空き地、そこで見守る大人の温かい目。年上の親分・おまめの子分、悪がきがいたずらをしては近所の大人に叱られ

て、いろんなルールを学びました。そこ

は便利な携帯電話もゲーム機もない世界。大人はいつも忙しく働き、年寄りには年寄りの、子どもには子どもの役割があり、みんなが必要とされる存在で、人間同士の「絆」が確かにありました。幸いここ下町は、まだかすかにこの風景が残っています。「絆」をつむぎ直してきた私のこれまでの人生。「絆」の大切さに気づいた今だからこそ、改めて家族や近隣、そして日本を見直す時が来ているのではないのでしょうか。決して遅くはないと思います。ちょっとだけ先輩ママとして子育てママへの

Naoko Sasaki profile

1967年 東京都渋谷区生まれ。
中学～高校は実践女子大付属校
1989年 文学部卒業

読めば心がほっかほっか一男六女、
肝っ玉母さんの子育てエッセイ！

『子育て七転び八起き』
佐々木直子著
2012年3月刊 本体1,200円
産業編集センター



メール。子育てを支えてくれた町へ恩返しとしてのメール。巣立っていく我が子へのメールです。

新しい世界を見たくて男子校の明大に
編集部 実践女子大付属の女子中学・高校から、明大へと進学するのは珍しいと思いますが、明大に進学した理由を教えてください。

佐々木 当時の明治大学は、ほとんど男子校に進学する気分でした(笑)。一番の理由は、新しい世界を見てみたい。新しいことに挑戦してみたいという気持ちからです。在学中は山岳系サークルに所属しましたし、ゼミの先生や仲間ともお酒も飲んだり、男子校明大を



人気の出汁巻き玉子。自信があるからすべて手作り

魚には自信あり、2階は1日1組限定で宴会も

謳歌しましたよ。卒業のころはパプルの絶頂期で、有名生保に就職することもできました。

編集部 そして今は、下町(東京)墨田区の東向島でお弁当屋「魚八栄五郎」を夫の栄五郎さんと二人三脚で営まれ、一男六女の母さんもしているのですね。

佐々木 人の縁で本当に不思議です。主人は新潟出身で、築地の割烹で修業して、私と出会って結婚して、子どもに恵まれ、念願の店「魚八栄五郎」をやはり縁があって、ここ東向島に開店しました。そして今年結婚20周年を迎えます。

私を、子育てを支えてくれた「絆」

編集部 家族との「絆」、町との「絆」、子育てを支えてくれた町や人への恩返しのために具体的に実践していることがあったら教えてください。

佐々木 困っている人を見かけたら声をかけてみる。ゴミ出しの時には隣の人に「おはようございます」とあいさつをしてみる。道で座り込んでいる人には「大丈夫ですか?」と手を貸してみる。近所の子どもたちにニコリ笑いかけしてみる。忙しい私にもできることです。

ほんのちょっとした勇気を持つことです。

編集部 最近、母校・明大との「絆」を強くお感じになったとおうかがいしました。

佐々木 「本を書いてみたい」という私の夢、その背中を押してくれたのも明大の先輩で、『子育て七転び八起き』の編集を担当してくださった風讀社の校條真さんとの出会いでした。本の出版もあって、はじめて墨田区の校友会行事にも参加しました。20数年ぶりの校歌を先輩たちと声高らかに歌いました。母校・明大でつながる。先輩・後輩のつながり「絆」を感じましたし、本当にありがたいと思いました。

編集部 母校で学ぶ後輩たちにもエールというか、先輩としてアドバイスしてくださいませか。

佐々木 思い切ってチャレンジしてほしいです。新しい何かをはじめること



下町の風情が、愛情がたっぷりの美味い惣菜が並ぶ

は素晴らしいことです。学生時代はいろいろなことに挑戦できます。もちろん私も、誰かの役に立てるよう、恩返しできるように頑張っています。

